

# 学びをつなぐ子供を育てる教育活動の創造

～2年次研究 深い学びを実現する学習づくり～

研究推進委員

## I はじめに

近年、情報化やグローバル化、人工知能の発達等をはじめとした社会の大きな変化を背景に、資質・能力の育成の重要性が論じられている。来る未来を見据えたとき、子供たちにどのような力が必要なのかを吟味し、学校、家庭、社会等が連携しながら、それぞれの役割を果たしていくことが求められている。

平成29年3月に公示された次期学習指導要領では、教育課程の重要性とその位置付けを明確にした上で、これからの時代が求める資質・能力を、学校教育を通していかに育成していくかという視点が示された。また、そこでは「主体的・対話的で深い学び」というキーワードと共に授業改善の具体にも触れている。

翻って本校では、総括目標である「主体的人間の形成」の達成を目指して、全教科・領域による教育課程研究を長年にわたって積み重ねてきた。近年では、平成22～25年の研究において、見通しと振り返りの充実による意欲付け、学びの意味や価値の自覚化、平成25～28年の研究においては、主体的な学びと学び合いに着目した協働的・双方向的な問題解決の在り方に取り組んでおり、これは次期学習指導要領の要点とも合致していると考えられる。これらの研究の成果については、改善が加えられながら今に引き継がれている。

さて、本研究を進めるに当たり、これまでの研究、とりわけ前研究の成果と課題、児童の実態等を分析した結果、以下の3点が課題として挙げられた。

- 課題や問題の解決を見通したり、学びを通しての自己の変容を積極的に捉えたりすること。
- 場面や状況、目的に応じて、課題や問題の解決に必要なことを選んだり考え出したりすること。
- 他の思いや考え、様々な感じ方のよさを認め、進んで関わりを求めること。

これまでの研究においても、これらの力に着目した授業の在り方について模索してきており、成果も報告されている。しかし、いまだ必要な力として挙げられる背景には、一つ一つの学習がその時々では効果的であっても、総合的、継続的な力の育成に向けて十分に機能していなかった部分があったのではないかと考えた。

その理由として、①これらの力の習得を実現する各教科等の学習が単発的なものになっており、総合的、継続的な育成が十分ではなかったこと②それゆえ、身に付いた力の価値を児童が十分に認識できず、児童が他の場面で活用できなかったこと、などが考えられる。本校においてどのような力を付けたいのかを今一度明確にし、それらを各教科等がどのように担い、どのような学習として具現化していくのかを明らかにすることが必要であると言える。

そこで、前研究の成果である「児童の主体的・協働的な学び」を基盤とした上で、「本校で育てたい資質・能力」と「それらを実現する学習の在り方」に焦点を当てて、研究を進めた。本研究により、児童の資質・能力を育む単元や題材の構成はどのようなものかを明らかにし、教育課程の改善につなげていくことを目指した。

## Ⅱ 研究の目的と方法

本研究の最終的な目的は、先述の課題を克服して能動的に学び続ける子供、すなわち「学びをつなぐ子供」の育成を目指すことにある。

### 【学びをつなぐ子供】

学ぶ目的や学び方を明確にし、他者との学びを通して自己の考えを広げたり、見方・考え方を働かせて自己の考えを形成したりする中で、資質・能力を身に付け、能動的に学び続ける子供。

ここでいう資質・能力とは、本校の教育目標と「生きる力」との関わりや、児童の課題等を踏まえて設定した、「本校で育てたい6つの資質・能力」である。様々な資質・能力の中から、本校の児童に必要なだと考えるものをまとめたものである。

<本研究で重視する資質・能力>

| 本校で育てたい6つの資質・能力 | 具体の姿                              |
|-----------------|-----------------------------------|
| A 解決策を構想する力     | 課題や問題を見付け、それらを解決するための見通しをもつ児童。    |
| B 情報を活用する力      | 課題や問題の解決に必要な情報を、取捨選択する児童。         |
| C 論理的に考える力      | 自分の考えの根拠を示しながら、筋道立てて説明する児童。       |
| D 創造的に考える力      | 物事を捉え直したり、新たなものの見方や考え方をしたりする児童。   |
| E 他と関わり合う力      | 他者と関わり、互いの考えや価値観を認めようとする児童。       |
| F 自らを振り返る力      | 自分の学びの様子や変容を捉え、客観的に考えたり評価したりする児童。 |

2年次研究では、設定したこれら6つの資質・能力を育成するために、各教科・領域において「深い学び」を実現することが不可欠と考えた。「深い学び」とは、各教科・領域の「見方・考え方」を働かせ、各教科・領域の本質に迫る学習のことと押さえている。このような学習を積み重ねることで、各教科・領域における資質・能力が確実に身に付き、それが本校で育てたい資質・能力の育成につながると考えた。

そこで、深い学びの在り方について、以下の3点に沿って明らかにする。

- 視点1 深い学びの学習デザイン
- 視点2 深い学びを創り出す授業展開
- 視点3 深い学びにつなげる評価

### Ⅲ 結果と考察

各教科・領域の実践を通して、「深い学び」を実現するために有効性が明らかになった手立ては以下の通りである（詳細については、各教科・領域の実践を参照）。

<「深い学び」につながる手立て>

| 有効な手立て                            | 国 | 社 | 算 | 理 | 生 | 音 | 図 | 家 | 体 | 外 | 道 | 総 | 特 |
|-----------------------------------|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 視点1 資質・能力と指導内容との関連性を明確にした単元及び題材構成 | ○ | ○ |   |   |   | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ |   |   |   |
| 1 教科横断的な単元構成                      | ○ |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   | ○ | ○ |
| 見方・考え方を明確にした単元構成                  |   | ○ |   |   |   |   | ○ | ○ |   |   |   |   |   |
| 系統性を明確にした単元構成                     |   |   | ○ |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |
| 児童の思考に沿った単元構成                     |   |   |   | ○ | ○ |   |   |   |   |   |   |   |   |
| 単元，教材の分析                          |   |   |   |   | ○ |   |   |   |   |   |   |   |   |
| 視点2 見通しをもたせる工夫                    |   |   | ○ |   |   |   |   |   |   | ○ |   | ○ |   |
| 知識の関連付けや概念化を図る工夫                  |   | ○ |   | ○ |   |   |   | ○ |   |   |   | ○ |   |
| 2 教師の発問，指示，声掛け，板書の工夫              | ○ |   | ○ |   |   |   |   |   | ○ |   | ○ |   |   |
| 教材化の工夫                            |   | ○ |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |
| 環境の工夫（ICT，掲示，教具等）                 |   |   |   | ○ |   |   |   |   | ○ |   |   |   |   |
| グルーピングの工夫                         |   |   |   |   | ○ | ○ |   |   | ○ |   |   |   |   |
| 目的を明確にした話し合い，交流活動の設定              |   | ○ |   |   | ○ | ○ | ○ |   |   |   | ○ | ○ |   |
| 視点3 児童の姿を具体的に想定した評価規準の設定          | ○ | ○ |   | ○ |   | ○ | ○ |   | ○ | ○ |   |   |   |
| 3 教師の適切な関わり（声掛け，コメント等）            |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   | ○ | ○ |   |
| 深い学びを見取ることができる振り返りの適切な位置付け        |   |   | ○ |   |   |   |   |   |   |   | ○ | ○ |   |
| 視点を明確にした自己評価                      | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ |
| 他者評価，他者評価を取り入れた                   |   |   |   |   |   |   |   | ○ | ○ |   |   |   |   |

全体総括

## IV まとめ

2年次研究の成果と課題について以下にまとめる。

|                                | 成 果   | 課 題  |
|--------------------------------|---|--|
| 【視点1】<br>深い学びの<br>学習デザイン       | 児童に付けたい資質・能力を明確にするとともに、単元や題材の中で「深い学び」がどこに現れるのかを想定して学習活動を構想したことにより、単元や題材と1単位時間との関連や、1単位時間の意義を押さえた学習を展開することができた。  | 本研究の最終的な目的は、本校で育てたい資質・能力をいかに育成するかということである。そのためには、各教科・領域で付けた資質・能力を関連付け、本校の6つの資質・能力の育成につながるような単元及び題材構成や教育課程について、今後も検討を重ねていく必要がある。  |
| 【視点2】<br>深い学びを<br>創り出す学<br>習展開 | 複数の教科・領域において、とりわけ「知識の関連付けや概念化を図る工夫」、「教師の発問、指示、声掛け、板書の工夫」、「目的を明確にした話合い、交流活動の設定」等の手立てが、「深い学び」となる上で有効であった。学習内容や児童の考え等を相互につないでいくことが、「深い学び」において欠かせない視点である。 | 「深い学び」の実現には、対話やグループ活動を盛り込むといった「型」があるわけではない。今回効果があったとされる手立てについて、それらを固定的に捉えるのではなく、児童に付けたい資質・能力と児童の実態に応じて、最適な指導方法を組み合わせていくことが必要である。 |
| 【視点3】<br>深い学びに<br>つなげる評<br>価   | 教師が児童の「深い学び」の姿を具体的に想定したことで、児童の学びの過程や資質・能力を的確に見取ることができたとともに、児童の学びの状況に応じた指導をすることができた。また、視点を明確にした振り返りの継続は、児童が、学習した内容の価値や自らの変容を自覚することにつながった。              | 児童が学習の過程を通して身に付けた資質・能力について、その深まりや広がりといった質的な変容を適切に見取る必要がある。そのため、複数の方法から総合的に見取る評価の在り方について研究を進めていく。                                 |